教員になってはじめて感じること

若　者

焼　山　佑　美*

Several Things that I Feel after Being a Faculty Member

Key Words：Relationships with students, Mental horizon, Encouragement

はじめに

今回、執筆のお話を頂いた際に、「好きなことや趣味など、研究に関することでなくとも何でも好きなことを書いてくれればいいよ」と大変ありがたいお言葉を頂戴したので、当初は自分の趣味（車と音楽（特にヘヴィメタル））についてひたすら書こうと思っていました。しかし、バックナンバーを拝見すると、当初予定していた内容はあまりにも本誌に似つかわしくない（というか別の意味で有名になってしまうような…変な人間だと思ってもらうにはちょうど良いのかもしれませんが）内容であることに気づき、さすがにこれはなんとか方向転換せねば、と文章をこねくり回してしまったので、とりとめの無い文章になってしまった感が否めません。が、気を取り直して、今回は教員になってはじめて感じるようになった種々のことについて述べさせていただきたいと思います。

学生との距離の変化

私は2015年に准教授として大阪大学に赴任したのですが、それまでは韓国・浦項市にあるPOSTECH（浦項工科大学校）というところで5年間、博士研究員からスタートして、赴任直前まで特任助教として研究を行っていました。少しPOSTECHの紹介をさせて頂くと、韓国にある大学・研究施設の中でも理系では1、2位を争うところでして、世界的にも著名な先生方がたくさん在籍しておられます。学部から上がってきた学生さんは非常に優秀で（国内のトップ数%層とのこと）、英語でのコミュニケーションも全く問題無く行うことが出来（そもそも大学院入学要件としてTOEIC800点以上を要求される）、話していてこちらも勉強になることが多かったです。町に出ると英語が使えないのは日本と似ていますが、それでも一部の人がなんとか英語または日本語でコミュニケーションしようとしてくれたことは、初めての一人暮らしが外国だった私にとってとてもありがたく、浦項のオープンさを強く感じる出来事でした。POSCOという大きな製鉄会社（新日鉄と特許でもめていましたが…）があり、もともと日本人も含め外国人技術者が数多く訪れていたことから、そうした空気が形成されているのかもしれません。

さて当時、私は数人の学生さんを直接指導していたのですが、外国ということで生活、特に役所関係や病院関係はかなりの部分を学生さんに頼っていたこともあり、指導する側、指導される側というよりも、良い意味でなれなれしい、職場の同僚のような持ちつ持たれつの関係でした。はっきり言いますと、学生時代の延長のような感覚です。実際、彼らから「先生」と呼ばれたことは特任助教となってからも一度としてありませんでしたし、お互い下の名前で呼び合うことが普通でした。「先生」を意味する言葉は、滞在していた5年間のうち事務担当の方の口から数回聞いたのみです。当時、御世話になった現・東京工業大学の河野 正規 先生ご自身も非常に気さくなお人柄で、おもむろに「今日は今から体育館に行ってラケットボール（壁打ちテニスのようなモノ）をやるぞ」だとか、「今年は全員（教授含め）マラソン大会で10キロ走るのが義務」だとか、休みの日にたまたま来ていたメンバーを集めて「冬だから

* Yumi YAKIYAMA
1981年6月生まれ
大阪大学大学院　理学研究科　化学専攻
博士後期課程（2010年）
現在、大阪大学大学院　工学研究科　応用化学専攻　准教授　理学博士
TEL：06-6879-4592
FAX：06-6879-4593
E-mail：yakiyama@chem.eng.osaka-u.ac.jp

市場にカニを食べに行こう」（浦項は港町で魚介類が豊富）と言い出したりするような方でしたので、ラボ全体が非常にアットホームな雰囲気でした。

それが普通だったのに、日本に戻ってきていきなり「先生」と呼ばれるようになったものだから、当初どんな顔をすればいいのか分かりませんでした（多分、引きつった半笑いになっていたと思います）。この「先生」という言葉は私に取っては非常にやっかいなもので、「先生というからには何でも知っていて、学生に質問されたらすべて正しく答えねばならない」、という強迫観念とセットになっており、やっと今になってある程度割り切れるようになったものの、今でも学生さんに聞かれた事に対しすぐリアクションできないと「あかんなあ…」と自己嫌悪に陥ることもしばしばです。

さて、本欄「若者」に執筆する機会を頂ける年齢ということで、学生との距離はそこそこ近い（とはいえ、かなりのジェネレーションギャップは感じつつも）し、事務窓口で学生と間違っていただけることも多々ある（ちょっとうれしい…但し、それはそれで教員としてのオーラが足りていないということなのかもしれません…！）ことから、個人的にかなり学生寄りのノリであると自負しているのですが、やはり学生との間にはある一定の壁を感じざるを得ません。例えば、研究室の飲み会で座るときに教員周りの人口密度がやたらと低い時や、明らかに「気を遣われている」事がうかがわれる対応など…。当たり前のように感じられるかもしれませんが、学生さんとつい最近まで同じような感覚でいた私にとっては、感覚が追いつかず、「もしや赴任早々何かやらかしてしまったのか！？」と少なからずショックでした。ただ「先生」という言葉が肩書きにくっついただけで、こうも扱いは変わるのかと、受け入れるまでに少し時間がかかりましたが、「壁がある」ということは逆に言うと「教員として見てもらえている」ということです。やっと今ではこの微妙な距離感ともうまく付き合えるようになってきたと感じます。

教員になって…

その一方で、教員になったことで自分が学生であったころには全く理解できなかったり、想像だにしなかった様々なことが分かるようになってきました。だんだんと教員側の立場で考えることが出来るようになったということでしょうか。まず一番に感じるところは講義の準備が思いのほか重労働であったということです。これは本当にやってみないとわからないことで、ああ、あの先生は色々と分かりやすくなるように相当心を砕いて下さっていたのだなあ、それなのに後ろの席でいつも内職しててごめんなさい、だとか、先生のレジュメ作成の苦労も知らずいつも気持ちよく爆睡していて申し訳ありません…などと、新しく担当する講義の準備をする度に今更のように心の中で謝っています。今私が担当している学生達も、もし教員になったら「爆睡 or 内職していてごめんなさい」と思ってもらえるのでしょうか…そもそも爆睡 or 内職させないようにする工夫が先ですが。

学生時代の視野（特に就職活動期）

次に思うところは、学生のころの視野というものはとんでもなく狭かったな、ということです。これは、特に就職活動時、あと学生さんとのディスカッションを通して感じることで、単純に経験の違いによるところが大きいとは思います。就職活動については、最近は必ずしも在籍している専攻分野のメーカーのみならず、コンサルティング業やIT企業を就職先に選ぶ学生さんも出てきたことから、少なくとも化学系メーカーへの就職がほとんどであった私の学生時代に比べると、少しずつ意識が変わってきているのかな、とは感じます。それでもなお、ほとんどの学生さんの修士卒業後の進路として、「企業への就職」が既に引かれたレールのように存在することを考えると、結局のところは私が学生のころとほとんど変わらないのかもしれない…と思います。確かに一部の学生さんは海外進出も含め色々な進路を視野に入れていますが、そうした学生さんの数が劇的に増えたようにはあまり感じません。安全パイを狙う時代的背景もあるのでしょう。かくいう私自身も、今でこそえらそうなことを言っていますが、何も考えずに就職活動をしていましたし、企業説明会や工場見学にも行っていました。それでも博士課程進学を選択したのは、実際に芽が出てきた研究をもっと続けたいという思いに加え、そうした就職活動の中でいまいちピンと来なかった…といいますか、「みんなと同じ就職というルートでええんかな？」

という思いがあったからです。加えて、自分が企業で働いている様子を想像することが全く出来ませんでした。就職したからといってその時点で人生が決まるわけではもちろんありませんし、就職しようが進学しようが、結局のところ同じ様な悩みを持ち、今までの自分に挑戦しながら生きていくということに違いはないということに気づくのは大分後（遅い）になってですが、大多数の同期たちとは違うルートを選ぶということで、とりあえずの自分らしさということを出そうとしていたのかもしれません。そういう意味では私自身もまた、視野の狭い学生の１人だったのだなあと感じます。

学生をエンカレッジするということ

また研究を続けていく中で、何が大事か、ということをしみじみと考えるようになりました。先日、ある学生さんと進路について話し合ったのですが、どうもその学生さんは自分のやってきたことを過小評価しているようでした。その学生さんは研究室の中でも独自のテーマを扱っており、4年生時のテーマ立ち上げから修士2年生で論文を出せるレベルまでコツコツと着実に頑張ってきた子です。私からしてみれば、ノウハウも何もない0からの出発でそこまでやるとは、なんと素晴らしい、優秀な学生さんだ！と思いますが、本人の意識は全く異なっており、「私には他の同期と比べて知識も技術も結果も全然ない…」というものでした。しかし、よくよく考えてみれば、その学生さんがそう思うのも無理はないかもしれません。私も研究室の中では一人だけ別テーマで、しかも指導してくれていた先輩が修士課程進学時に博士研究員として別の研究室に移られたので、当時准教授でいらっしゃった森田　靖先生（現・愛知工業大学）の直接のご指導の元、研究を続けていました。独立テーマだったので、どうしても私は研究室内でテーマ的に孤立してしまったように感じるばかりで、全く状況の異なる人たち（ここでは研究室の主プロジェクトで研究する同期たちのこと）と比較すること自体に意味が無いということすら理解していませんでした。そんな中、森田先生は私が修士学生で、しかも博士課程に進学するかどうかも分からない状況であったにも関わらず、いろんな学会・シンポジウムに連れて行って下さり、知見を広げる多くのチャンスを下さいました。また、論文を書くチャンスもかなり早いうちから頂けていました。ただ、経験も知識も少ない私は、そうしたサポートがあったにもかかわらず、結局のところ単純に論文の数だけで優劣をつけて何かと落ち込んでいましたし、当時の先輩の「大事なのは論文の数だけじゃなくて、どれだけ意味のあること、今までにないことをやりとげたか」という言葉も心に響くことはありませんでした。今ならこの意味が非常によく分かります（論文の数を気にしてしまうのは変わっていませんが…）。結局、その学生さんには自分の思うところを伝えたのですが、いつの間にか自分が励まされる側から励ます側に変わっていることに大きな責任を感じました。また、学生さんに良い意味での自己肯定感をもってもらえる様に、常々働きかけることが如何に重要かということを強く考えさせられる出来事でした。

おわりに

学生さんと私との関係はこの数年間でめまぐるしく変わっていきました。その中で「学生」にたいする私の認識自体も大きく変化し、かつて「自分自身」であったものが、「面倒を見ないといけない後輩」に変わり、そして今では「研究を一緒に進めて行く仲間」、となりました。これまでは研究の主体となるのは自分自身、自分が踏ん張ればよい、自分の頑張りがそのまま成果につながると信じてやってきました。今はその意識ではなかなかうまくいきません。びっくりするくらいに空回りします。教員に成り立てのころは、このことが非常に大きなフラストレーションでありましたが、今では如何に学生さんとコミュニケーションを取って研究を進めていくか、自分の熱意を共有するか、そして楽しさを感じてもらうか、そうしたマネジメント能力の重要性を改めて感じる次第です。学生さんの性格・長所・短所は人それぞれです。新しい学生さん達と出会う度に、様々な出来事を通して新たな経験が生まれます。それを大事にして、彼らとの研究を楽しんでいきたいと思っています。

最後になりましたが、今回の執筆機会を頂いた大阪大学大学院工学研究科、安田　誠　教授と「生産と技術」の各関係者の方々に紙面を借りて厚く御礼申し上げます。